

研究紀要第27号

# ひとりひとりを生かす保育

——「子どもと共に創る生活」を通して——

1 9 9 1

島根大学教育学部附属幼稚園

## は じ め に

多くの研究者が遊びの研究をしており、系統立った遊びの分類も示されているようであるが、現場の教師は幼児ひとりひとりの遊びの姿を全面的に受け入れ、捉えることによって、日々の指導の方途を見出していく。幼児の生活は、睡眠と食事の時間を除けば、遊びが幼児の生命のすべてであるからである。幼児にとって、遊びとは生きることであり、より良く生きることを経験的に学んでいくことである。子どもたちの全面的発達をはかり、個性を引き出し、伸ばしてやろうとすれば、子どもたちの発達の過程に応じて教師が生活の環境を構成してやらねばならない。「子どもの自由にまかせる」という言葉のひびきにはよいが、それだけでは教育の本質を欠いている。教育は、個と環境との相互作用によって充実するものであり、ひとりひとりの経験は、集団の中で響きあうことによって、さらに拡大し、深化していく。また経験は、個の中で連続し、再構成されていく時、個の育ちが在る。

「子どもと共に創る生活」とは、子ども自身による生活の創出と教師の確かな判断における側面的な援助の機能的総合に求められるものとする。

このような観点に立って、本園の昨年までの研究がなされてきたように思う。本年度は、この研究をさらに一步具体的に確かめたつもりである。この紀要をお読み下さった皆様の忌憚のないご意見、ご叱正をお寄せいただければ幸いである。

最後に、本年3月まで、本研究の中心としてご活躍下さった前園長 福井一明先生に厚く御礼申し上げます。

平成3年7月

島根大学教育学部附属幼稚園長

福 田 悌 次 郎

# 目 次

## はじめに

### 総 論

#### ひとりひとりを生かす保育

##### 「子どもと共に創る生活」を通して

I 研究主題について	1
主題追求の経過	1
II 副主題「子どもと共に創る生活」を通して（第3年次）の基本的な考え方	2
1. 研究のねらい	2
2. 新幼稚園教育要領の受けとめと本年度の実践と研究	4
3. これまでの実践と研究を通して大切にしてきた指導性	5
(1) 生き生きとした子どもの姿を出させる	5
(2) 子どもが主体的に展開していく生活を支える	7
(3) 一人ひとりの経験や活動の連続と重なりを重視する	7
(4) 子どもの活動のリズムを捉えて「一日の生活」を組み立てていく	10
4. 研究の視点および方法	12
III 今年度の研究を通して注視していること	13
1. 子どもが見出していく環境と生活の展開	13
事例1 秋のしるしをみつけよう（各論4）	14
2. 子どもの気持や動きに応じて構成していく環境	15
事例2 ももたろうのおにたいじ（各論1）	15
事例3 俊ちゃんのパーティをしよう（各論1）	17
3. 友だちとのかわりの中で創っていく総合的な活動と表現	18
事例4 すきな生きものと仲良しになろう（各論2）	18
4. 一人ひとりの発達に注視し、「環境」との関わりから主体性の育ちを探る （各論1・3）	20
IV 3年課程の教育課程	22

文責 野津 道代

### 各 論

1. 子どもの主体性の育ちを探る(1)	野津 道代	33
— 子どもと共に創っていく環境との関わりから —		
2. 自ら創り出していく表現活動を支える	坂本千賀子	93
— 生き物と関わる活動を通して —		
3. 生き生きとした姿を求めて — 3歳児1学期の生活より —	星野 和美	131
4. 子どもの興味関心から広がり深まっていく生活と経験	森山 純子	157
— 「つきさんの展覧会を開こう」の活動から —		

— 研 究 同 人 —

園 長	福 田	梯 次 郎
副 園 長	寺 本	和 子
研 修 主 任	野 津	道 代 子
教 官	森 山	純 子
”	星 野	和 美 子
”	青 木	規 子
”	坂 本	千 賀 子
講 師	馬 庭	垂 希 子
”	舟 木	ル ミ
前 園 長	福 井	一 明
前 講 師	高 橋	浩 美